

(註七) *Laemargus* なる屬名は一八三七年 Kröyer に依て創定せられたるものなれど、之はその少し前(矢張同年なるも) Hentle に依つて既に魚類の屬名に用ひられたるものなればとて、一九〇二年、Poche は之を *Orthogoriscicola* と改めたり(スコットに據る)。

本種の分布は頗る廣し、目下知られる分布區域は左の如し。

日本。歐洲の諸海。南アフリ加。ニュー・ジールランド。北米の太平及太西洋岸。

(尙 *Philorthogoriscus* に就ては、他日又更めて報告するの期あるべし。
Orthogoriscicola の全體圖は、前出『動物學雜誌』第九十一頁に矢野氏の掲出せられたるものあれば、茲には之を略す)。

(石井重美)

●肥大吸蟲の構造に關しての訂正及追加

余は本誌第三百十七號に於て肥大吸蟲 *Fasciolopsis buski* の構造を記載したるが、其中に此種の陰莖囊の存在を疑ひたり。其後臺灣中川幸庵氏の厚意により同地豚より得たる數個の標本の寄贈を受けたるを以て充分に其構造を検するを得たり。主なる部分を摘記すれば次の如し。

(一)陰莖囊は明に存在す。され共其構造はオドールネル(一九〇二年)の記載と異り、囊壁は一般に生殖輸管に密に接近し居り、殊に貯精囊及其附屬育囊を圍める部分には其間に殆んど間隙なし。末端に近きて攝護腺部の附近に至りて兩者の間に多少の空隙を生せるを見る。射精管

には明かなる棘あり。

(二)體の腹面には密接せる鱗狀棘あり。背面には全く是を缺く。

(三)排泄囊は最も異なる構造を有す。即ち正中管より數對の側枝を出せる外體前部に於て一の腔をなして口腹兩吸盤を全く圍繞せり。又皮下には網狀の腔所あり。

以上の構造は益其 *Fasciola* 屬に親縁なき事を證し、殊に排泄囊の構造は *Echinostomidae* に近きを示せり。口吸盤小にして腹吸盤に後方に膨出部ある事も亦 *Echinostomidae* に例あり。其他の構造皆 *Echinostomidae* の性を具ふ。唯是と異なるは食道の壁がクチクラよりなりて上皮を有せざる事なり。口邊に隆起なくして又棘列を缺けども是は *Echinostomidae* 中にも是を缺ける種あり。恐らくは此科の一異型と見らるべきもならん。詳細なる報告は他の種と共に將來公にすべきも、兎に角前回の訂正をなす事上の如し。

(小林晴治郎)

●近江國龍華村の化石哺乳動物群

同地方産の化石哺乳類として先には「ステゴトン」(NAUMANN:—"Ueber japanische Elephanten der Vorzeit"; "Paleontogr." XXVIII, 1882) あり、近くは比企忠氏の水牛("Bubalina Remains from the Province of Omi"; "Mem. Coll. Engin. Kyoto Imp. Univ.", I, 1915) あり。

今又前記水牛の發見者たる新帶國太郎氏は某氏の秘藏せる化石骨片を撮影して鑑定のために予に寄せらる。就て見るに恐らく大形の羚羊類ならむと思はるゝものゝ大腿骨の破片なり。該骨片の記載は新帶氏を待つ事とし、予は唯是等化石動物が示す動物群全體として若干四川省老山の化石哺乳動物群 (MATSUMOTO: "On some Fossil Mammals from Szechuan", "Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ." 2nd Ser., III, 1915) に類似せる節あるを指摘し、以て該地方探査家の注意を喚起せむとす。

(一) 「ステゴドン」 普通 *Stegodon insignis* として知られたれども、予は支那及日本産として本種の臼齒咀嚼の傾き方が「マストドン」型に屬するの事實を認めたるにより、從來異名として閑却せられし *Stegodon orientalis* を復活せしめて是に當てたり。龍華村産の本種が該特徴を示し居る事は既に予の報告中に指摘せり。本種は支那にては四川雲南・福建・甘肅、日本にては龍華村及小豆島近海等より知られたり。

(二) 水牛 四川省老山の化石水牛に二種あり。一は臼齒珐瑯質表面の著しく粗糙なるもの、他は同じく殆ど平滑なるものなり。印度の化石水牛が齒の記載を缺き居りて比較も同定もなし能はざりしにより、予は單に符號を以て兩者を區別し置けり。龍華村産水牛は臼齒珐瑯質表面の粗糙なる點に於て予の *Buffelus* sp. a に一致し、又臼齒の大きさに於ては略予の *Buffelus* sp. b に合ふ。茲

に遺憾なるは sp. a の上顎臼齒が知れ居らずして、上顎臼齒のみなる龍華村産水牛とは詳細なる比較をなし能はざる事なり。是等の化石水牛は凡て瓜哇の化石水牛よりも大なる臼齒を有す。

(三) 羚羊類(?) 四川省老山の化石哺乳動物群中には牛類特に水牛族に關係深き大形の羚羊類たる *Probosciparus* の二種あり。その大腿骨が發見せられなば恐らく龍華村産の問題の骨片が示す位の大さならむと思はる。勿論問題の骨片のみにてはその屬をすら判定し難し。要は今後の探査にあり。

以上龍華村の化石哺乳動物群に關する吾人の知識は目下の所餘りに斷片的に過ぎ、到底決定的の意見を述べ難けれども、唯茲に最も注目すべきは「ステゴドン」が水牛及恐らく羚羊類と共に産するの事實なり。斯かる產出は日本に於る唯一の例に屬し、予はこの點より之を支那に求めてかの四川省老山の化石哺乳動物群を想起するものなり。印度のシワリック及ナルバダ并に瓜哇の「ステゴドン」哺乳動物群とてこの例にはあれども、「ステゴドン」の同一種なる點に於て老山のそれに止めを刺す。

龍華村の化石哺乳動物群に於て、水牛の存在は鮮新世初期より前ならざるを示し、「ステゴドン」の存在は洪積世古期より後ならざるを示す。不幸にして「ステゴドン」は象屬程完全なる時代決定者ならず。例へば *Stegodon ganesa* 及 *insignis* の二種は *Elephas hysudricus* の時代た

る鮮新世幼期と *Elephas namadicus* の時代たる洪積世古期との兩期に跨れり。吾人が目下の知識に於る龍華村の「ステゴドン」動物群は、小豆島のそれと著しく異なりて一方四川省老山のそれを想起せしむるものあるより見れば、恐らく比企氏の考へられし如く鮮新世幼期——特に最幼期——に屬するならむ。

「ステゴドン」及水牛の存在は當時の日本が動物分布學上東洋洲の勢力下でありし證據なり。所屬の動物より推せば、龍華村の化石哺乳動物群は疑もなく森林動物群なり。云ひ換ふれば沼澤地に緣故ある動物群なり。是等の化石動物は恐らく當時の琵琶湖畔に逍遙せしものか。

(松本彦七郎)

●所謂病鱈の病因

昨年十一月、水産講習所の丸川氏、カムチャツカ方面より、雲鷹丸にて、所謂病鱈といふを持歸られたり。件の鱈は、體著しく瘦せて、一見何等かの疾病に罹れるものなる事を思はしむる如くなれり。検査の結果、諸内臓の表面、腸間膜等に、捲曲せる小形の線蟲多く寄生せるを見たり。疾病の原因は、最初、此の線蟲にあらばやとの説なりしが、腸の内部を検するに及び、其の説の妥當を疑はしむる如き事實に遭遇せり。即ち、腸管は、其の最後部を除き、全部、二種の線蟲にて殆ど充賑せられたり。殊に、最前端、胃の幽門に接せる處などは、寄生蟲の數

餘りに多き爲、互に相壓迫緊結して、之を引出すこと著しく困難なる程なりき。

胃中には全く寄生蟲を認めざりき。

腸管内に存在したる條蟲には二種あるが如し。一は稍や黄色にして、他は白し(ホルマリン標本)。何れも細長のものなれど、黄なる方殊に細し。長さは白き方黄なる方より一般に大なり。

所謂病鱈の病因は、上記腸管内の條蟲に歸する方妥當なるべしと思はる。

(石井重美)

●「ステゴドン」歐洲に産するか

「ステゴドン」なる化石象類の一屬は從來東洋洲及該洲に近接せる東亞の地方ばかりに産して居た(Scott)の著書にある北米の「ステゴドン」なるものは全く誤りとの事である。所がかの有名なるビルトダウン頭骨(*Elmthorpus dawsoni*)の報告には、最初の報告からその後度々の報告に至る迄、殆ど常として「ステゴドン」云々と云ふ事が挟んである。是が本當ならば歐洲にも明かに「ステゴドン」が居たと云ふ事になる。併し Woodward の記載及圖から判斷すると予には全く別な解釋がつく。

問題の「ステゴドン」と云ふ材料は二—三個の臼齒破片である。その臼齒の横稜は頗る高く且つ餘程鋭く尖り、横稜間の谷は深く且つ非常に挟い角を開いて居る。印度、支那及日本等の「ステゴドン」の臼齒を實見したる予が